

# JDDNET 体験ワークショップ2014

ワークショップ受講料：1 コマ 2000円（当日受付にてお支払ください）

## 【プログラム】

（第1部）10：30～12：30

### 【A】 成人の発達障害と新たな診断基準

対象：支援者

定員：30名

講師：市川宏伸（JDDNET 理事長／日本自閉症スペクトラム学会会長）

内容： 発達障害は、初めは小学校で話題になったが、最近は様々なライフステージで話題になっています。最近の考え方では、特性とされることが多く、発達障害そのものが“存在してはならないもの”とは考えられていません。何らかの不適応を起こし、本人や周囲が困っていれば支援の対象になる、と言うのが最近の考え方です。近年は成人の発達障害が話題になっていますが、発達障害は発達期には存在しているものであり、成人になってから生じるものではありません。成人になる前に、社会不適応のためにそのことに気付いて対応しますが、うまくいかないままに成人になる者、成人になって社会生活・家庭生活で不適応を感じて、「発達障害ではないか？」と疑問を持つ者、他の診断を受けて治療を進めていたがうまく行かず、発達障害の存在を疑う者などに分かれます。これらについて、事例を挙げて説明を行うとともに、診断や治療についても言及したいと思います。

精神科医が使う診断基準は、生じる症状の存在をもとになされています（操作的診断基準）。現在は、世界保健機関が作っているICD-10（国際疾病分類第10版）と米国精神医学会が作っているDSM-5（診断と統計マニュアル第5版）が使われ、厚労省は前者を用いて医療・福祉サービスを行っています。昨年5月にDSM-5が米国で発行され、本年6月に日本語版が売り出されました。日本語版の邦語訳は日本精神神経学会が担当しました。発達障害関係では、精神遅滞が知的障害能力群に、広汎性発達障害は自閉スペクトラム症/障害、学習障害が限局性学習障害に名称変更となり、チック障害は、発達性協調運動障害、常同運動障害とともに運動症/障害とされました。これらも含めたDSM-5の全体像についてもお話いたします。

## 【B】 「障害のある子どもの心理」 心理的疑似体験 (NPO 法人全国 LD 親の会)

対象：保護者、当事者、支援者

定員：40 名

講師：両川晃子（信州大学付属病院／長野県スクールカウンセラー／特別支援教育士SV）

内容： 発達障害のある子どもは特にそうですが、障害のある子どもは得意なところと苦手なところの差が大きいです。得意なところに標準を当てると苦手なところは努力不足とみなされ、苦手なところに標準を合わせると得意なところを延ばす機会が失われます。こういったとらえ方による不用意な大人の声掛けから、障害のある子どもは心理的に追い詰められたり、意欲を喪失したりします。また、自己肯定感の低下にもつながります。

本ワークショップでは、「注意・集中」「読み」「書き」「ワーキングメモリー」などの発達に困難さを抱える子どもの心理的状态を実感してもらい、大人が不適切な対応をした場合における子どもの心理の理解をしてもらいます。また、体験を通して、なぜできなかったか、どんな工夫があったら良かったのか、どのような声掛けを考えてもらったうえで、適切な声掛けや苦手なところに負荷がかからないような具体的支援の方法や、具体的支援につながるような配慮事項についても解説いたします。

## 【C】 やってみよう！ 構造化 (TEACCH プログラム研究会)

対象：支援者

定員：20 名

講師：黒田美保（福島大学特任教授/TEACCH プログラム研究会理事）

森裕幸（アシスタント）（社会福祉法人正夢の会 稲城市発達支援センター レスポーいなぎ）

内容： 構造化の基礎を学びます。構造化は、TEACCH メソッドの 1 つに考えられていますが、今ではほとんどの自閉症の支援に取り入れられている方法です。「構造化」とは、自閉症をもつ人にとって、環境を理解しやすく再構成し、不要な混乱をもつことなく安心して過ごせるようにすることであり、その結果、環境から様々なことを学習し、自発的に行動することを促進していく方法です。

構造化で伝えるべき情報は、以下の通りです。

①どこで(Where)②いつ(When)③なにを(What)④どれだけ、いつまで (How much) ⑤どのようなやり方で(How to do)⑥終わったら次に何をするのか(What's next)。構造化は、学習をする上での重要な環境を調整する方法であり、具体的な指導法や指導内容をさすものではありません。しかし、すべての指導の前提として非常に重要な役割を果たしています。体験ワークショップでは、架空事例を通して場所の構造化やスケジュールを考えてみます。

## 【D】 テーブルトーク・ロールプレイングゲーム (TRPG) 体験講座 (NPO 法人 EDGE)

対象：参加者（当事者（小学校高学年～20歳未満）、保護者、支援者）、見学者（保護者、支援者）

定員：15名（参加者）、20名（見学者） 計35名

講師：加藤浩平（金子書房編集部／東京学芸大学大学院）

保田 琳（東京学芸大学大学院）

内容：「テーブルトーク・ロールプレイングゲーム (TRPG)」とは、複数名でテーブルを囲み、参加者（プレイヤー）がそれぞれ「戦士」や「魔術師」といった「キャラクター」を操り、コンピュータではなく紙や鉛筆、サイコロなどを使って、お互いに会話をしながら冒険物語を楽しむ会話型のテーブルゲームです。現在、世代を超えて楽しられている“コンピュータ RPG”の元になっているゲームでもありますが、コンピュータゲームと違い、プレイヤーはルールの範囲内で、想像力の許す限り、自分のキャラクターを自由に行動させて、物語の中で活躍させることができます。そして TRPG は、参加者の会話（発言）の内容やサイコロの出目によって、同じ物語でも、まったく違う展開になることがありますし、さらに一般のゲームと違って、参加者間で勝ち負けを争うのではなく、参加者全員が物語を楽しむことが目的となります。

参加者同士がルールを守り、コミュニケーションと想像力を駆使して、一緒に物語を楽しむゲーム…と書くと、一見、自閉スペクトラム症 (ASD) をはじめとする発達障害のある子どもたちには不向きな活動のように感じられるかもしれませんが、しかしながら、これまで TRPG に参加した子どもたちは、みんな活動に積極的に参加してくれますし、活動の中では互いにコミュニケーションのやり取りを楽しんでくれています。

講師（加藤）はこれまでに NPO EDGE さんや東京都自閉症協会さんをはじめとする親の会での余暇活動、そして通級指導教室やフリースクールなどの小集団活動の場で、知的に遅れのない発達障害のある子どもや青年たちを対象に、TRPG を用いた小グループ支援を行い、それらの実践をベースに研究を東京学芸大学大学院で進めてきています。

本ワークショップでは、これまでの実践や研究からわかったことを簡単にご紹介し、併せて、子どもたちや参加者の方々にもご協力をいただき、実際に TRPG を体験していただきます。見学だけでも構いません。お子さんたちが実際に TRPG を楽しむ様子もご覧いただければと思います。

※当事者(子ども)参加の場合、お子様と保護者の方は、別々にお申込みをお願いします。その際、お子様については、お名前の後にカッコで“(子ども、ゲーム参加)”とご記入ください。保護者の方についても、お名前の後にカッコで“(〇〇〇の母／父、見学)”とご記入ください。

また、当日は、お子様だけの参加ではなく、保護者の方の同伴をお願い致します。

なお、お子様、保護者でご参加の場合の参加費につきましては保護者分のみのお支払いになります。

### 【参考文献】

加藤浩平(2013)「テーブルトーク・ロールプレイングゲームを用いた発達障害のある児童・青年・成人への対人相互交渉・コミュニケーションの支援」『アスペハート』第33号

**【E】 遊びや日常生活での活動を通じた発達支援**（一般社団法人 日本作業療法士協会）

対象：保護者、支援者

定員：30 名

講師：土田玲子（JDDNET 理事／県立広島大学教授／作業療法士／日本感覚統合学会会長）

内容： 子どもたちの心身の発達に必要な感覚や運動の要素を整理し、遊びや生活のコツをお伝えします。また、幼稚園や保育園、学校や療育施設、ご家庭で活用できる遊びをいくつか提案いたします。

主な対象は幼稚園や学校の教諭、保育士などの支援者ですが、ご家族の方にも参考にしていただける内容になっていますので、どなたでもご参加ください。

前半は遊びや生活での工夫について、作業療法士の視点から感覚統合理論に基づいてお話をいたします。また、後半は実際に遊びを体験していただく予定ですので、動きやすい服装でご参加ください。